樋口節夫が語る「朝鮮研究」の先達者と業績

―解放前と解放後―

野間晴雄

一　はじめに―解題に代えて―

朝鮮の地域研究を後半生のライフワークとした樋口節夫（一九二四―二〇二一）氏は、コロナ禍で親族の面会すらままならないなか、生家に近い高槻市津之江のサービス付き高齢者向け住宅で、令和三年四月二九日、老衰のため九七歳の生涯をひっそりと閉じた。

氏は高槻市の旧城下町（当時は三島郡高槻町）の商家の生まれで、大阪第一師範学校（天王寺）本科を一九四三（昭和一八）年九月に卒業後、ただちに吹田市立第一国民学校勤務、翌年には現役入隊したが、終戦で復職、まだ敗戦の混乱がおさまらない一九四六（昭和二一）年四月に、立命館大学文学部地理学科（旧制、夜間部）に入学した。同四九年に卒業後、小学校教員を辞して立命館大学助手（地理学教室）を二年したのち、京都府立桂高校教諭として二一年間勤務した。その後、七二年に名城大学、七七年に愛知教育大学、八〇年には母校の大阪教育大学、さらに八六年に奈良女子大学（二年）で国立大学を定年退官した。その後一四年間、枚方市に新設された大阪国際大学の教授として勤めあげた。じつに教職歴は五九年の長きにわたる。温厚で面倒見のいい人柄によって多くの教え子や同僚、上司に慕われた。関西や中京圏での教育界や学界関係者との人脈も広く、とりわけ母校である立命館大学での教員・先輩・後輩の人望はたいへん厚かった。草創期の地理学科で、藤岡謙二郎、谷岡武雄という泰斗が中堅であった時期に薫陶を受け、卒業後に乞われて助手となったことにもその一端があらわれている。

また、藤岡謙二郎が主宰した民間のサークルである野外歴史地理学研究会（ＦＨＧ）でさまざまな役職を歴任したのち、藤岡なきあとニューＦＨＧを立ち上げ、一九八九年～九三年まで国内七

回、海外三回の巡検を会長として企画実行したことも特記できる。とりわけ第一回の海外巡検は韓国で実施し、研究会編で『一九九〇年韓半島と済州島―韓国の民俗と歴史的景観』（一九九〇）が刊行された。済州島、ソウル、仁川、光州、全州、扶余、大田、大邱などを訪問した[1]。

図１　研究発表する樋口節夫氏
（2003年10月4日、野間撮影）

氏の専門分野は人文地理学のなかでは都市地理学、商業地理学と一般には言われるが、私は歴史地理学の素養と自らの生活体験に裏打ちされた都市地域論、商業地域論が本領であり、それに加えて米を中心とした農業地域論でも光彩を放っていたことを強調したい。主要著作は本稿の末尾に列挙しておいたので参照されたい。

本稿は、その樋口が幼少期からずっともち続けてきた朝鮮への関心、とりわけ朝鮮産米の流通や植民地的性格が反映した歴史的都市の研究へ邁進していった軌跡にも言及しながら、日本の植民地であった時期と解放後の戦後の日本人の韓国に関する地理学の研究史の流れを、自らのおいたちともからめて語っている貴重な記録である。

本稿に掲載した口述資料は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究Ｂ「地理学を核としたアジア地域研究のデータベースと研究者ネットワークの構築」（課題番号１４３９００３５、２００２～２００３年度、研究代表者　野間晴雄）によって記録された。いささか発表の時期を逸したきらいはあるが、二〇〇三年当時の録音記録を掲載し、それに私が注釈を加えたものである。

二　「朝鮮研究」の先達者と業績
―解放前と解放後―

以下の資料は人名やその生年その他の付記事項を筆者の方で（　）で補い、小見出しをつけて、補足の注を付したものである。話題提供のあとには、質疑応答も発言者の名前を付して記した。

１　解放前・解放後の朝鮮研究

樋口　それでは、これから「朝鮮研究の先達者と業績」ということで、解放前および解放後を比較しながらお話をするというこ

とにします。この間、ずいぶんいろいろな学校を経験させていただきました。その最初が、名古屋の名城大学でした。そこで初めて研究者というかたちでスタートしたわけです。今日お話する教材として、三つの資料を持ってまいりました。

その一つは、織田武雄先生の退官記念のときにできました論集[2]（本稿では非掲載）。そこに今日のテーマ前半とほぼ同じ、「地理学における『朝鮮研究』――戦前の一齣――」ということで解放前の様子を抄録したものがあり、これを使わせてもらおうと思います。

それからもう一つは――解放後のことがらにはじつは空白の時期があり、日本の敗戦、韓国側の解放、それから朝鮮戦争ということもありまして、日本と韓国との往来もできず、現地の調査が進みませんでした。また、現地の人も何をやったらいいんだろうかということで、模索の時代がありました。

そういうことで、その事情を二つ目の資料としまして――馴染みのない資料ですが、この『地理学』（韓文）をコピーしてきました（本稿では省略）。「第一三号、一九七六年六月、地理学三〇年、回顧と展望」ということで、大韓地理学会の当時の会長である李燦（イ・チャン）先生[3]が一九四五年から一九七五年の三〇年間――日本の研究者が何を模索したらいいかということで、もがいていた時代です。現地でどういう研究が行なわれていたかとか、学会づくりをどのようにして始め、韓国の地理学会が復興したかというビジョン、ならびにその下で「地形学」、「気候学」、「都市・村落地理学」、「経済地理学」、「文化・歴史地理学」、「地理教育」、「応用地理学」等、各パートの権威者が三〇年間を振り返って、現地の人の研究のエッセンスだけを捉えて掲載したのがこの号であります。

そのなかでいちばん基本的なことは会長の基調演説がありますので、それをコピーさせていただいて、大韓地理学会の三〇年間をお話ししようと思います。

それから、三つ目の資料は今日持ってくるには重く、かつこれを全部コピーしたら大変なので、ひじょうに便宜的な資料を最近考えてみました。洪慶姫（ホン・ギョンヒ）[4]という現地の慶北大学名誉教授が、この大学を創設されて以降、たくさんの碩学を輩出し、最終的にはそこを定年したあとで、積年の夢であった「日韓地理学関係文献目録」の労作があることを思い出し、その一部のコピーを持参したわけです（後掲の表2）。

奈良女高師（奈良女子高等師範学校）の卒業生です。私は（晩年の）二年間その大学にいたのですが、先生が卒業生というのを知りませんでした。現地に行きまして、初めてご馳走になった時、「私、奈良の出身です」、そして、「帷子（かたびら）（二郎）という先生にお世話になりました」。ということで、それからお世話になりながらご無沙汰しておったんです。

ここにおいでの渋谷（鎮明）さんにも、「この文献をつくった

ときにちょっとお世話になりました」ということもあがっております。

それから、この文献の凡例には、こういう文献を使用しましたということで、文献の名前や朝鮮総督府の補助目録が挙がっています。人文地理学会の『文献目録』一九四五年、第一冊目（第一集）のところから第九冊目（第九集）――それから、文部省の大学学術局とか、保柳睦美先生なんかの朝鮮半島、台湾などに関する地理学的な研究論文目録とか、それから恥ずかしいことですが私の名前で、「地理学における『朝鮮研究』」（があがっています）。こんな薄っぺらなものまで参考文献で入れてもらっているわけです。それに比べると、立岩巌先生の『朝鮮――日本列島地帯地質構造論考―朝鮮地質調査研究史―』は、解放前と解放後の自然地理を勉強する場合、ぜひとも読んでおくべき文献です。それから、奥野（隆史）さんなんかの文献も書いてあります。よく資料を集めたものと思います。

私がこの三つめの資料をこのなかに入れさせていただいたのは、日本人が韓国の研究をする時にどのようにして文献を拾っていくか、そしてどのようにしてスタートするかということで、ぜひとも見なければならない根本的な資料と考えたからであります。そして、この先生は私よりも四歳くらい上で、一所懸命、地理学に身を捧げた大先生なのです。朝鮮研究ではこの先生を絶対に忘れてはならない、本当に横綱級の大先生と思います。ただし、ソウルの先生方からは名前が出てこないんです。韓国ではソウル大学の一派というと語弊がありますけれども、もう一つは「キョンポク」という慶北大学（があります）。日本で言えば東京（大学）と京都（大学）ということで、秋風嶺（しゅうふうれい）の峠を境にして、就職問題でも分水嶺があるようです。こんな話をしたら、ここにおいでの同窓の方で、「具体的に、それは嘘や」ということを言われるかもしれませんが、そんなことでも忘れられてはならない大先生です。

じつは私もひじょうに恩恵を被りました。私の韓国についての研究をメモしていきましたら、いちばん最初に発表したのが昭和四二年の「米に関する地理学の関心と記録」です。これは『人文地理』の一九巻一号、一九六七年（に掲載された展望論文）ですが、その当時、考えてみますと米の生産は質第一でいくべきか、量を第一にいくべきか、将来はどうあるべきかを考えてまして、学ぶべきは朝鮮の産米を研究することだと（当時の私は）結論したわけです。植民地（外地）から、ずいぶん日本に米が入って、日本（内地）の米がどんどん負けていくという状況がありました。そのなかでどういう選び方をしたらいいか、将来の（日本の）米農業の参考例を朝鮮に求めたのです。

その初出に、「朝鮮農業理解のために」ということで、雑誌『地理』（古今書院）に出したレポートがあります。[5] このレポートはまだ朝鮮に渡らないで朝鮮を知ろうとしたその当時に、文献探

しをしなければならないということで、改めて「地理学における朝鮮研究」という短文を書いた戦前の一齣という事情があるわけです。

前置きはそれくらいにしまして、ちょっと座って、これからそれぞれ区切りのあるところでおしゃべりを終わろうと思います。

2　地誌の必要性と現地調査

いちばん最初の資料をもとにお話します。「遅れた地理学における『朝鮮研究』の出発」という標題で、なぜ日本の人たちが朝鮮研究をしなければならないかという出発点を明治の初めに求めたとき、いちばん最初に、「やろう」ということで音頭取りをしたのが、東京地学協会の『地学雑誌』なんです。『地学雑誌』のなかにどういうものが入っていたかというと、当時学者がいるわけではないので、結局は現地の人びとの記録とか、あるいは日本から渡航した人たちの旅行記が最初の記事でありました。

ただし、そういう記事でも欲しいというのが当時の日本だったわけです。とくに朝鮮の地誌関係についてはほとんど無知で、その場合の朝鮮の地誌がじつは韓国の文献でもそれは漢文調の文献でありました。だから、中国のものを漢訳して、またそれを日本語訳するというややこしいものが地誌ということで登場するわけです。「漢文体の地理書。無刻版のため、原書本との対校はできないが、当時の風潮を知るに便利な書である」ということで、坂根（達郎）さんの『朝鮮地誌』[6]が紹介されています。この古本は今でもちょこちょこ顔を出してきますね。それから、東京地学協会の『地学雑誌』の記事には、先覚者によるアジア各地の旅行談がまことに多いことを注意したいのです。初期のレポートの多くは旅行談でありました。

そのうちに、具体的に（私は）『地学雑誌』のなかで「地理学がどうあるべきか」ということを考え始めたなかで、「いちばん簡単な地理学はこうなんだ」ということで、地理学とは「山川湖海都府物産の名を臚列したる文撰」としたのが地理学だと考えていた一派に行き着きました。これがいちばん初歩の地理学です。そういうことがありましたけれども、日本の人たちが明治の開国以降、現地にボツボツ出まして、とくに元山（ウオンサン）、あるいは釜山とかというところに人びとが住みだしたかたちのなかで、とにかく欲しかったのは現地の説明書ということです。これから元山、釜山に行こうという人が、「どんな街やというのを教えてくれ」という紹介書が欲しかったのです。[7]

それから、政府機関[8]が具体的に現地に出て行くなかでも、日清・日露の戦争を背景にして戦後の復興をいかにすべきかというときに、いちばん最初に誰が出ていったかというと、大阪商人なんかがよく行っているわけですね。戦争が終わるか終わらないかというなかで、大阪商人が荷を積んで出発しているのです。何が売れるんだろうかというような商圏調査なども大阪商工会議所[9]等

を通じて調査をしているのです。そういった調査団のさきがけというのがあるわけです。そういう民間人の調査、あるいは官民を通しての現地の事情調査というのがいろいろ始まるわけであります。

そして、おもしろいことに「『地学雑誌』は『東京地学協会ハ本年夏季休業ヲ利用シ、七・八月ノ交、朝鮮及浦塩斯徳ニ向ヒ学術旅行ヲ試ミントス、朝鮮ハ……』」ということで、『地学雑誌』が夏休みに学生諸君なんかを集めての学術調査で、結局は、「北鮮からウラジヴォストークにかけて、みんな旅せんか」という広告を出しています。そういうことで、日清あるいは日露の戦争の後においては日本が韓国に、あるいはその先に、どんな関心を持ったか興味がありました。

私は他の本にもちょっと書いたことがありますが、日清戦争や日露戦争が終わった段階でこんなことがあるわけです。戦争は終わったけれども、引き揚げても日本で職がない。そういう軍人はどのようにしていたんだろうか。現地の警察官とか国境警備の仕事を求めて、じつは在郷軍人とか、引き揚げの軍人のなかには、現地に行く人がひじょうに多かったわけです。たくさんの在郷軍人や国境警備隊が来ているわけです。

それで、その国境の警備隊が、この場所（例えば「白頭山」の山麓の恵山（ヘサン））に着くまでにどんなルートを辿るんだろうかに興味がありました。日本海を北上し、元山に上陸、ここから山道をトコトコと、先ほどの朝鮮の遊行ではありませんけれども、馬に乗っていくわけです。そのいちばん先頭に誰がいるかというと、現地の軍隊です。憲兵がいちばん前に、（次に）指揮隊が、それから就職するそういう人たちがいる。いちばん最後に誰がいるんだろうかというと、女の人もいました。集団でですね。何日間かかけて、最終的に恵山まで曳行しました。

それでは、そういうところに人びとがなぜ惹きつけられたんだろうかというと、ここに行けばひじょうに給料が高いわけですね。「職業軍人としての給料を保証しましょう。それ以上にしましょう」と。だから、ふつうの兵隊でも、小学校だったら校長くらいの日当をくれるわけです。家族もいっしょに住める、官舎も付いていますし。ただし、物資の輸送がたいへんなんです。冬になるとここが通れない。夏はここでは、大きな船、小さな船、もう一つ小さな船を乗り継いでここに来る。下りはいいけれども上りはたいへんです。ただし、ここは下りもたいへんなんです。筏を組んでということで。筏組みにはどこの職人が来たのでしょうか。日本の近畿地方から来ているんです。筏の職人は十津川の人です。十津川水系の筏師が戦前、現地の人を訓練しながら材木をおろしているわけです。

それを監督する人たちが林業試験場の人です。林業試験場のトップはどんな人であるか。高等文官（試験）に合格した人がソウルにいて、そして現場に行く人は下の人たち。たいへんな勤務地

なんです。

横道にそれましたけれども、そういう現地に入った人たちの指導、そして中央のソウルでの指令、もう一つは東京からということで、日本政府が要求するいろいろな現地の調査というものが具体的に朝鮮研究の元になるということであります。したがって、資料その1のところに「地理学雑誌輩出のころ＝調査資料を背景にして＝」と書きましたけれども、それは出先の機関――ずいぶん（多くの）出先の機関があるわけで、その機関がそれぞれ調査をした資料を背景にし、科学者なんかが協力して、『地球』とか、『地理教育』とか、『地理学評論』など前後して記載しまして、地理（研究）が満開になったわけです。

「『地球』の創刊号は関東地震研究号である」と書いてありますが、その特集号のなかにも、中村新太郎[10]先生の「朝鮮の奥陶紀層に関する智識」は、朝鮮地質研究所での活動を一つ背景にした学術的な研究です。この他に、じつはこの先生には、地形・地質の研究だけではなく、「朝鮮地名の考説」ということで、「行政区劃に関する地名」、「施設に関する地名」、「地形に関する地名」、「民居に関する地名」とか、その他いろいろな地名研究があります。

その内容を考えていきましたときに、東京大学とか京都大学から現地の機関のお手伝いをして現地調査された先生の他に、現地の政府の嘱託職員ということで、ひじょうにたくさんの研究成果を報告した先生がいるわけです。善生（永助[11]）先生、それから小田内（通敏[12]）先生を忘れてはならないと思います。

3　解放前における地理学者の朝鮮研究

それから調査がどんどん進み、最終的には、昭和一〇年代のところが、じつは朝鮮における地理学の研究開花の年と考えてもいいんじゃないかと思います。この昭和一〇年代は、研究が開花した年というだけではなく、日本の朝鮮、その他の植民地支配をしたいちばんの頂点に達したのがこの昭和一〇年代でありました。日本の農業生産もこのあたりが頂点で、それからは米が不足してくるし、開発もそのあたりまで、日本が軍事態勢に完全に入ってしまう年でもあります。じつは、（この時期に）日本の先生方の地理学研究もずいぶん出ています。そのなかには、戦後日本の地理学会なんかで、継続してリーダーであった先生――地形学の多田（文男）、人口の井上（修次）、済州（チェジュ）島研究の桝田（一二[13]）、それから武見（芳二）、浅井（治平）。日本の戦後のリーダーの人たちが昭和一〇年代に名前が出ております。

そして不思議なことは、先生方の研究の関心がどこにあったかというと、いちばん端っこ（地域の縁辺）であった。多田先生は地形学でどこを研究したんだろうかというと、蓋馬（ケマ）高原です。もう一つは鬱陵（ウルルン）島。もう一つは済州島。端っこばかりをやっているんですね。ただ、田中啓爾先生はちょっと違って、あの先生は線から面の研究です。ずうっと下から上にあがって、あるいは上に

あがってきたら下にさがってというように全土いろいろ旅をして、「こうしよう」ということで区分をした。いわゆる人文地理学を中心にして地域を区分しているわけです。

ただ、ここで忘れてはならない一つの事情があります。いちばんいい研究はどなたの研究だったかというのは、尺度はありません。しかし、この研究こそがいろいろな調査とか研究のモデルであったということを、ある一つのレポートが序言を書いているわけです。この先生は小川琢治先生です。そのモデルがじつは昭和一〇年の報告書になるわけで、今西錦司という先生の『白頭山』[14]（一九三五）という本なんです。ここに持ってくればよかったんですが、重いので持ってきませんでした。中国では長白山（チャンバイ）ですね。ここの研究の報告が昭和一〇年。『京都帝国大学白頭山遠征隊報告書』という（標題で）東京の梓書房から出た本です。

これは白頭山の探検記なんです。夏に行ったらいいものを、わざわざ冬に行っているわけで、たいへんなことです。夏でも滑ってたいへんなところを冬に行こうということなんで、とうぜん援助がいるわけです。支援をしたのは李王職、朝鮮総督府、それから朝鮮軍司令部。もう一つは、第二〇師団司令部です。こういうところが支援をしました。民間は新聞社などからいろいろ支援してもらっているわけです。

昭和九年から昭和一〇年にかけて――その出発点はどこであったかというと、先ほどの恵山鎮。ここを出発して一つ川を越えて、この山の中をずうっと岨道（そわみち）を通って、ここ、冬の白頭山までのルートを探検しているわけです。そのなかに地理学者が入っているのかといえば入っていません。グループのメンバーは、動物とか、植物とか、鉱物などを中心とした学生と医者などが中心でしたが、そんなに大きな編成ではありませんでした。いずれにしましても、そういう大がかりな援助がなければ、この辺境地域はなかなかわからなかったと解釈をしてもらったらいいのではないかと思います。そういう調査困難地域での探検なのです。

それから、ちょっと調査漏れになって戦後に引き継いだ代表的な一つの場所があるわけです。それが済州島という島だったわけですね。これは、桝田一二という、戦後は立正大学で定年を迎えられた先生。東京高師の田中啓爾氏の助手時代に、休みごとに島に行って、バスに乗ってグルグル何回巡ったんだろうかと思うほどです。

この島は私も何回も行きましたけれども、研究するのにはひじょうに好都合です。ここでは基地を一つ取っておいたらいいわけです。嫌になったらバスに乗ってグルッと回るとここに戻るわけです。近道をしようとすると、円周をグルッと回らなくても、横断道路があります。今でも基地をどこにするか、心配はいりません。これまで済州島はいろいろ研究されてきました。それが戦後に引き継がれて、日韓の地理学者が共同研究をしました。それが、ソウルの洪（始煥）さんという立正大学を出た建国大学の先

生と、東京教育大の高野（史男）[15]先生のグループが、「済州島」の共同調査をして、学術交換会をしました。ただし、白頭山の研究に比べたら純粋な研究であって、私も学会のシンポジウムの時に、「お前、座長をせい」と言われて討論した覚えがあります。

そういうことで、戦争末期にはほとんど研究らしい研究ができませんでしたけれども、朝鮮が植民地になりましてからの年代を案外うまく総督府自身がまとめてくれたものがあるわけです。それが『施政三十年史』です。これは、総督府の朝鮮施政三十周年の置きみやげですね。ただし、学術的な価値が高いというものではありません。むしろ、『朝鮮総攬』という一冊本がありますが、そこにはいろいろな雑誌の文献が掲載されています。

そういうことで、私はここに書いてあります文章（資料）から部分的に外れたところまで話をしたわけです。解放前に私なりに思い出した代表的な先生とその文献はそこにあげています。

4　解放後の韓国地理学の出発

次のお話をしなければならないわけですが、資料で先ほどあげました『地理學』[16]（韓文）があります。そこのところを順番をおっていきますと、これはハングルで書いてあるんです。私はハングルが充分に読みこなせるというわけではないので、漢字をひろっていきましたらだいたいの意味がとれるんじゃないかということと、数字とあわせて具体的に見ていただけたらと思います。

李燦（リ・チャン）というソウル大の先生は当時の（韓国地理学会の）会長さんです。じつは韓国地理学会の第一報をどなたがされたかというと、この間やっとわかったわけです。日本に紹介されたのは、洪（慶姫）先生たちが日本でのＩＧＵ開催の時に、東大の故・木内（信蔵）先生と接触があったんだと思います。その先生がいちばん最初に韓国地理学会第一回の発足事情を、地評（『地理学評論』）のなかで紹介されたのがあるわけです。これが最初だと思います。

いちばん最初「朝鮮地理学会」として出発し、その後「韓国地理学会」に改称してからの事情があがっているわけです。いちばん最初は、戦後の地理学会の中身というのは大学中心ではありませんでしたから、そこに二つ先行したところがあると書いています。京城大、延禧専門學校、普成専門學校――延禧、普成というのは私学の名門ですが、国立が京城大です。ただし、ここに地理学の先生がいたかというと、いませんでした。地質の先生はいました。じつは、いちばん最初に学会で活動した人たちというのは中等学校なんかのカリキュラムの編成とか、資料作成とかということで活躍し、地理学は啓蒙的なものから出発するのです。（その後に）大学らしい大学をつくったわけです。ソウルの師範大学と慶北大学の師範大学ですね。

その後、教育大学院というのがその系統の上の地理学専攻です。それから、文理大学の上の地理学科というかたちの大学院づ

くりをしていくなかで、ひじょうに努力をされた先生方が何人かそこにあがっているわけです。地理学科の一九五〇年から一九七五年までの定員、それからその横には各大学院で「碩士學位授與者數」と書いてある、「碩士」というのは修士です。何人くらい出したかというと、結局、多いところがソウル大学と慶北大学ということです。

それから、韓国の地理学界で案外国際的に知られた先生や、国際学会なんかによく出てきた先生の名前があがっているわけです。東京の学会、ＩＧＵ地域大会に出た最初の人たち（と並んだところに）は会長さん、洪慶姫先生もあがっています。洪先生は、その次の一九六〇年のところにも顔を出しております。なかなか日本びいきの先生だったわけです。

その三〇年の間にどのような研究が韓国でなされたかということを、当時の韓国地理学会のオーソリティーが、たとえば地形学を朴魯植さん、気候学が金蓮玉さん、それから都市・村落地理のところでは姜大玄さん。経済地理は刑基柱さん。文化・歴史のところは盧道陽さん。地理教育のところは鄭璋鎬さん。応用地理は趙東奎さん。それぞれ、権威のある大先生の研究レポートがそこにリストアップされているわけです。

ただ、注意しなければならないのは、地形学とか地質学は、解放前それから解放後、過渡期のところにもひじょうにたくさんのレポートが出ていることです。なかでも気候学のあたりは、金蓮玉という梨花大の先生がこんなことを書いているわけです。「日本の学者が基礎的な理論を提供してくれて、そして気候学なんかの体系化ができました」。ということで、じつは解放後、しばらくの間は日本の大学でそれぞれの機関で勉強した人がリーダーになり、その人たちが育てた人たちがこの文献の中にたくさん登場してきます。なかでも、碩士論文というのがリストアップのなかにもいくらかあると思うので……。

だから、日本の修士論文というのはどれだけ格が高いかというのはちょっと疑問があるんですが、向こうの人たちの碩士論文というのはたいへんなんですね。私も、洪先生の慶北大学に行った時に、「レポートを見せてください」と言っても見せないんですね。どうしてかというと、「金庫に入れて、もう鍵がかかっています」という表現をするわけです。むしろ、門外不出。これは、日本の人たちの研究の公開というのとはちょっと違った装いがあるということでした。ただし、それが今まで続いているかどうかは別なんです。そういうところを一つ知ったわけであります。

5　解放後の日本人地理学者による朝鮮研究

結局は、一九七五年以降のことがらがどうなっているかというのは――どうしてもその後の三〇年というものを知りたいわけですが、まだ充分に調べがついておりませんので、あらためてこの洪先生の文献をもう一回紐解きしたわけです。それが、みなさん

表１　日本で発行された“韓国地理関係文献目録”（洪慶姫，1994，ソウル）

項／年	1 地質	2 地形	3 気候	4 其他自然地理	5 人口	6 村落	7 都市	8 経済地理	9 農業	10 牧畜	11 林業	12 水産業	13 鉱業・動力資源	14 工業	15 商業	16 貿易	17 交通	18 政治地理	19 民族・民俗	20 歴史地理	21 地図	22 地名	23 地理学史	24 地域計画・地域開発	25 知覚・行動	26 地理教育	27 地誌	28 紀行・観光	計	項／年
1950	·	···		···					···			·	··			·	·			··	··	·							21	1950
1951	·	·						·											·	·									5	1951
1952	⑬	·	·						·								·			··		··					···		24	1952
1953	·		·					·	··						·					···							·		9	1953
1954	·								·			··							·	·			·				··		8	1954
1955	···				·															·		·					·		4	1955
1956	···	·		·				·	··						·					···		·					··		15	1956
1957	··			··	·	·		·	··																		··		9	1957
1958	···		·	··		·			·										·	···	··						·		17	1958
1959				·		·										·			··	···			·				·		10	1959
1960	·	·						··	···									·		⑥		·							15	1960
1961	·		·		·			·										·	··	····		·	·				·	·	18	1961
1962	··				·			··	·									·		⑫			·				·	··	24	1962
1963				·		·		···	···		·			·					·	··	·	·							14	1963
1964								····	···	·				·		·		··		·····			·				·	·	21	1964
1965				·	·		·	·	·		·		·	·		·		·	·		·	··				·	···	···	25	1965
1966							·	·						·						⑦	·						⑥	·	20	1966
1967	···							·	···		·	·	·	···						···							··		18	1967
1968					···	·	·	··	···					··	·				·	⑦	··	·	·						25	1968
1969	··		·		·		·	·	·			··		·			·		·	··							··	····	21	1969
1970	····	··			·	··		···	··					··	·	·			·	·		··					·	··	23	1970
1971		··			·				·					···		·			·	···	·	·		·			··		18	1971
1972	·				··		·	··	·					·					·	·	··						·	·	14	1972
1973	·	·		·	··	·		··						·		··			·	·		·		···			·	·	19	1973
1974		·	·			·			·		·				·		·		·	··				··			···	··	18	1974
1975		·	·			··	·	··				·		·		·			···	··							··	···	21	1975
1976			··		·	·		··			·								···	···							·	·	14	1976
1977	·	·		·	·	·	·		···					···		·			··	···							·	·	21	1977
1978		··	·		·		···	·	···				·	···		·	·	·	···	··	·						··	··	28	1978
1979			·			··	··	··	⑦	·		·	·	··			·		·	··			·		·	·	·	··	28	1979
1980	·	···	·			·	·	·	⑥	··		·								·	·			·			·		22	1980
1981		··	··	·		·	···	·	·	·	·						·			··	··			·			··	·	23	1981
1982		·		·			⑥		·					·	···		··		···	·									19	1982
1983		·					···		···						·				·	··		···						·	17	1983
1984		··							··					·								·					·		6	1984
1985		·		··			···		··						·		·		·	··	·	·	···	·	·		···		23	1985
1986		···	·	·		·	··	·												··	·		·		·	·	··	··	19	1986
1987			·	·	··		··	·	··		·				·			·		·	··					·			17	1987
1988	·	·	·		·		··							·	···			·	··	··				·			··		17	1988
1989		·	·				·				·			·	·				·	··	·			·		·			13	1989
1990	·	···				·	··		·					···						··						·			15	1990
1991			·			·	··							·			·								·			·	7	1991
1992																														1992
備考	小林・立岩・高橋	赤木・大矢・町田	李・朴（恵）	森	石・森田	野村・鶴藤	樋口・成・南・朱	中川・四方	久間・中川・桜井		藤田		吉田		宮川	善生・樋口		韓	竹本・山下	辻・金	矢守・旗田・山田・高野	船越	加藤	辻	谷浦			辻村・村上	内藤	備考
計	48	36	19	20	21	25	42	41	68	5	8	10	6	35	15	11	11	9	40	114	21	20	12	11	3	6	39	32	746	

（洪慶姫『韓国地理学関係文献目録』、1994，ソウル、より樋口が集計）

方に「こんな資料をよく持ってきたな」と思われるかもしれませんけれども、プリントをこしらえました（表1）。洪先生の『日本で発行された韓国地理関係文献目録』を年度別、同時に項目別に、各年度にどれくらい出たかというものを、升目にしながらそこにポツを打っているわけです。「あ、一つ出てきた」、ポツということで……。この表の見方は、縦長のものを見ていただきますと、五一、五二……と書いてあるのが、一九五〇年まで、一九五一年……。五一年から、収録の九二年まで。そして、一番が地質、二番が地形ということで、二八番の観光まで。

先生方は（字が細かすぎて）読めないかもしれませんけれども、一番の地質を見ていただきますと、五二年ところにはひじょうにたくさんポツがあり、（多すぎて）打てなくて一三と書いてあるわけです。一〇を超したのはそこだけ、一九五〇年。なぜそこにたくさん出たのかというのは、韓国で研究した資料を日本に持ち帰ったところで、風呂敷の包みを開けて公開したというのが一三ほどあるということです。これは、地形のところでも同じです。ただし、地形のところは八〇年とか八六年のところでポツポツ出てきますが、そこには日本の人たちの研究も入っているわけです。赤木、大矢（雅彦）、町田（貞）となっていますが、この赤木（祥彦）さんは――日本で何人韓国地理学会の会員になっているか知りませんけれども、赤木さんは韓国の地理学会の会員なんです。花崗岩地形（や乾燥地形）をやっている方です。

それから項目別で見ていきまして、ひじょうにたくさんのレポートがこの文献に出ているところは、二〇番の項目です。二〇番のところは「歴」、「地」、「歴史地理」と書いてあります。洪先生が拾いました文献のなかで、一九四五年以降に歴史地理は一一四本あります。そのなかで五本以上のところが「五」と数字があがっているわけです。一九六〇年、六一年、六二年、それから六四年、六八年。なかでも六二年がいちばん数が多くなっています。そのときに研究のリーダーとしていろいろと資料を残していただいた先生は、ここにもおいでの先生がおられますけれども、山田（正浩）先生。亡くなられました矢守（一彦）さん、あるいは高野（史男）さんのレポートなんかが代表的なレポートの一つに入るわけです。

それから、二番目に数が多かったのが六八本ということで九番の農業関係で、七九年、八〇年のところで多くなっております。そのなかで、私が米に関する研究の関心でどうしても見なければならなかった代表的な資料は、戦前、戦後を通じて東畑精一・大川一司の『朝鮮米穀経済論』という有名な書籍もあります。これは一九三五年に出た本ですが、その後長く読まれた代表的な本です。

その次は、地誌というのが五九本あるわけです。歴史地理と農業、それから地誌というのが研究の三本柱になっているわけですが、じつは地誌について注意をしなければならないことがらが一

つあります。これは、戦前と戦後――私はバラバラで話をしているかもしれませんけれども、戦前の韓国についての資料のなかで、地誌はひじょうにたくさんあるということです。

じつは、それは各道別だから、京畿道とか、忠清道とか、全羅道それぞれみんな道のことがら、郡のことがら、面とか邑のことを、それぞれ日本の『〇〇要覧』とかと同じように義務づけているのかどうか知りませんけれども、みんな出している。そして、偉い人が来た時に「このように報告しましょう」ということで、報告書と一緒なんですね。ただ、注意しなければならないのは、解放前において、全羅道とは別枠で、「済州島」が出ているわけです。これは特別だと思います。

いずれにしましても、解放後における研究を見た時に、歴史地理がひじょうに数多く、矢守（一彦）先生が李朝時代の邑とか、境界のことを話されたり、都邑の分布と規模を、あるいは朝鮮の城のことなんかを報告されたりしました。関心が薄かったところは、二枚目のプリントのところでわかると思います（表2）。

ただ、一つ注意しておくべきことがらは、解放後、数の上ではあまり多くはありませんけれども、韓国都市の復興とかいうなかで、都市の研究というのがひじょうに盛んになった、一つのブームの時期があります。いちばん多く研究が出たのは昭和五七年。この年は日本の「地理学評論」とか、「人文地理」とか、「東北地理」でもそうだろうと思いますけれども、都市研究がひじょうに盛りだくさん発表されました。そのなかで目立っていることが一つあるわけです。それは日本人の発表ではなく、韓国の人たちのなかで日本の各大学に留学をした人たちが、その成果を学位論文というかたちで日本の雑誌にたくさん書いているというわけです。

そのなかでも有名な先生は、南（榮佑）さん、それから、朱（京植）さん、それから成（俊鏞）さんの三人は傑物だと思います。先ほど、ここにおいでの先生方のなかにも、「私は韓国に留学した時にこの先生に習いました」と、南先生をあげていました。私は、この先生とはどこかの学会でお話をしている時、「偉い先生やな」と思いましたね。

当時は計量地理学（隆盛の）第一の時期で、いろいろなデータを数的に処理した数理地理、空間モデルなんかのオーソリティーだったわけです。この時代の先生が、今、韓国地理学会の現役の大リーダーであるわけです。だから先ほど、三五周年の時にレジメにまとめた先生の時代から、この昭和五八年あたりに学位をもらって現地の指導者になった、それくらいの人たちが現在の韓国地理学会の大きなリーダー格です。ちょっとそれより古い先生が、元（学喜）さんという慶熙大学におられる先生です。この先生なんかを含めて現役の代表格と考えていいんじゃないかと思います。

とりとめもない話をしたわけですが、最後に、戦前のことがら

表２　日本で刊行された韓国に関する戦後の地理学文献目録抄（樋口節夫選別）

分野別							
	1. 地質	48	S 27	小林貞一 松下進 立岩巌	鴨緑江南岸の朝鮮系 平壌炭田の衝動構造 朝鮮方向の構造について	東亜地質鉱山誌　1 地質学雑誌　58-687 地質学雑誌　58-682	1952 1952 1952
	2. 地形	36	S 55	赤木祥彦 多田文男	韓国でのフィール・ワーク 朝鮮半島の地形研究史の一端	地理　25-5 地理　16-11	1980 1971
	3. 気候	19					
	4. （1）其他自然地理（水文）	20(3)					
	4. （2）其他自然地理（土壌）	2					
	4. （3）其他自然地理（生物）	7		森為三	朝鮮の動物概観	朝鮮学報　1	1951
	4. （4）其他自然地理（海洋）	5					
	4. （5）其他自然地理（災害）	3					
	5. （1）人口（人口一般）	21(10)		石南国	韓国の人口増加の分析	勁草書房	1972
	5. （2）人口（移民）	11		森田芳夫	戦後における在日朝鮮人の人口現象	朝鮮学報　48	1968
	6. 村落	25		浅香幸雄	朝鮮の集落	集落地理講座 4	1959
	7. 都市	42	S 57	樋口節夫 朱京植 南榮佑 成俊鏞	韓国の「都市論」再考－都市空間の把握を中心に 韓国の都市化と都市システム：1960年‐1980年（1） 空間モデル 中心地システム	古今書院 地理学評論　55-1 東北地理 地理学評論	1981 1982 1982 1982
	8. 経済地理	41	S 39	中川信夫	韓国の経済構造と産業発展	アジア経済研究所	1964
	9. 農業	68	S 59	櫻井浩	韓国稲作生産力の新段階とその構造	アジア経済　20-8	1979
	10. 牧畜	5					
	11. 林業	8		藤田佳久	旧韓国時代の朝鮮半島の森林植生	愛知大学国際問題研究所紀要　85	1987
	12. 水産業	10		吉田敬市 吉田敬市	韓国末期の朝鮮漁業 朝鮮水産開発史	人文科学　2-3 朝水会	1948 1954
	13. 鉱業・動力資源	6					
	14. 工業	35	S 46	宮川泰夫 黄載	韓国の工業配置 韓国の工業－其の発展と地域的展開	東北地理　22-2 地理　23-2	1970 1978
	15. 商業	15	S 63	善生永助 善生永助 善生永助	朝鮮における市場経済生活 朝鮮在来の商業慣習	朝鮮学報　4 朝鮮学報　9 朝鮮学報　46	1953 1956 1968
	16. 貿易	11		樋口節夫	大正における朝鮮産米の海上輸送と釜山	歴史地理学紀要　12	1971
	17. 交通	11	S 57	韓桂成 韓桂成	韓国における自動車貨物流動の空間的パターンとその変化 韓国における旅客流動の地域構造	東北地理　34-4 人文地理　34-6	1982 1982
	18. 政治地理	9		竹本賢三	李ラインの問題について	朝鮮研究月報　28-29	1964
	19. （1）民族・民俗（人種・民族）	40(7)	S 57				
	19. （2）民族・民俗（民俗）	33	S 37	金達壽 金達壽　他	日本の中の朝鮮文化　6冊 日本文化と朝鮮　3冊	講談社 新人物往来社	1971-1976 1973-1978
	20. 歴史地理	114		矢守一彦 矢守一彦 山田正浩	朝鮮の歴史地理 李朝における城邑の分布と規模について 李朝時代の邑－その構成要素と機能	歴史地理講座　2 地理学評論　35-8 歴史地理研究と都市研究（下）	1958 1962 1978
	21. 地図	21		船越昭生	朝鮮におけるマテオ・リッチ世界地図の影響	人文地理　23-2	1971
	22. 地名	20	S 57	加藤全吾 加藤全吾	朝鮮地名・姓便覧 朝鮮地名要覧	日本加除出版 京文社	1965 1965
	23. 地理学史	12	S 60	辻稜三	韓国地理学会の動向（1）、（2）	地理　30-1, 2	1985
	24. 地域計画・地域開発	11	S 48	金万亨	韓国の国土総合開発の分析	地理　16-11	1971
	25. 知覚・行動	3					
	26. 地理教育	6					
	27. 地誌	59	S 40	中村榮孝 姜在彦	日本と朝鮮 朝鮮－その歴史と風土－	至文堂 法律文化社	1966 1966
	28. 紀行・観光	32	S 44	澤田清 田中啓爾	韓国を訪ねて（1）（2）（3）（4） 私の海外旅行－朝鮮・満州・中国・台湾・欧米－	地理　14-1～4 地理　14-1	1969 1969

で漏れ落ちがたくさんあるわけです。ほんとうは今お話をした先生の他に、戦中あるいは戦後――いわゆる橋掛けの時代ですね、あのあたりで、その前に活躍され、どのパートのところでも出てくるのは善生先生でしょう。その人たちの業績もそれぞれ暖めて、じつは山田先生なんかにもお話を聞かなければいけないと思いますけれども、とにかく戦前のことを見るのにも、やはりこの文献（資料３）は見てほしい。戦後の朝鮮研究を日本の政府はどれほどしたかというと、何もないと考えてもいいわけです。ただし、戦前の朝鮮研究は総督府を中心にして、その出先機関がひじょうにたくさんの調査をしまして、いくつも報告書を出しています。朝鮮の地形とか、地質とか、水路の図とか、ああいうのも一つですし、何かにつけても政府機関というものを抜きにしては考えられなかったのが戦前の姿と考えていいと思います。

そういう意味で、みなさん方も古本屋さんなんかで朝鮮のことを書いてあるのがありましたら、目を配って拾ってもらったら案外価値が高いということですね。先ほど言いました『白頭山』という本なんかは、私は一所懸命探していて、いろいろ本屋さんで探してもらって、一冊出てきた。「買いませんか」と言われたのが一万五千円するんです。一〇〇ページちょっとの本でね。だから、複製の要覧なんかでも、もう一万円クラス、二万円、三万円です。韓国語のものはひじょうに高いですね。そんなことを言いましたら、もう時間が過ぎました。

最後になりましたけれども、先覚者のいろいろな業績を一つ頭に入れながら、現場の仕事をしてもらったら、また現在のことがよくわかるんじゃないかと思いまして、古いことをおしゃべりしたわけです。どうもご静聴ありがとうございました。以上で終わります。

６　質疑・討論

渋谷（鎮明）　樋口先生、どうもありがとうございました。

若干時間は超過しておりますが、韓国研究、朝鮮研究に関する先生方もおられますので、せっかくですので、この際聞いておきたいということがおありでしたら、また何かご質問などありましたら少しだけお伺いしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

野間　先生が朝鮮、韓国の人文地理に関わられる個人的なきっかけをお聞かせいただけないでしょうか。

樋口　個人的なきっかけは、これは言ったら恥ずかしいようなことがきっかけなんです。

私の家は高槻です。その高槻に商人町があるわけです。昔の町家です。もともとは農業兼商人。そのなかで何を売っていたかというと、米を売っていたわけです。売っている代表的な米が、朝鮮米なんです。

休日、親に「何か仕事がないか」と聞いたら、どこどこの場所を指定するわけです。そして、「仲間の人がいるからそこで店番

をせい」と言うわけです。それは、じつはあるところでひじょうに安い米を売る店がある。そこの店と競争せなあかんということで、朝鮮米の安売りをしていたわけです。そして、その朝鮮米の安売りの内容を見ると今と同じなんです。具体的に言うと、朝鮮の米と日本の米を混ぜ合わせてブレンドして安く売る。朝鮮の米の割合が多かったら安売りできるわけです。

その安売りしている中身はどれで量るかというと――その店で、朝鮮の米というのは売ったらひじょうに得なんです。それぞれ三〇キロ入っている。ただし、袋を開けて升目で量ると、日本の米の升目より、朝鮮の米のほうが升目が多いんです。わかりますか?これは、朝鮮で検査をする時に、朝鮮の人たちから米を買い取る時には升目を多くして、日本の市場に持って帰ってきた時には升をきったらまだ米が余る。これは昔の近江商人と同じことですね。「升目は一升升でも、大きい升と小さい升がありますよ」という商売をしていたわけです。だから、今でも目方でいかなければいけない。昔の商売人はうまく儲けるという、そんなことに一つの不思議があった。

これはもちろん、戦後私の家は米穀統制なんかがあって廃業しました。そういうことが一つ関心であって、私の生活の資料が、たいてい朝鮮米と関係があったわけです。

衣料がなかったときに、「おまえ、どんな着物を着ていたんだ」というと、朝鮮米の袋を着ていたというわけです。わかりますか? 朝鮮米の袋というのは、ひじょうに強い木綿なんです。そこに検査の印がパーンと入っているわけです。群山(クンサン)から来たもの。木浦(モッポ)から来たもの。仁川のもの。みんな袋に入っているんですよ、木綿の袋に。じょうぶなんです。衣料がないときは、その袋はどうしていたかというと、それを晒すと完全な木綿の生地になるわけです。

そういうことから、生活を見ていくときにひじょうに身近なものとして関わりあいがもてます。いろいろと今の米問題を考える時にも、原点は朝鮮の米、あるいは台湾の米を日本が買った段階から、結局は出発しなければいけないということで、(私は)大陸に目を向けたのです。日韓基本条約がなって早速現地に出ることにしました。

渋谷 ありがとうございました。

三 おわりに

樋口節夫氏の六〇年以上にわたる地理学の研究のなかで韓国の研究は大きく、戦前における関西と韓国の米の流入への関心から、韓国の米作やその流通に関するものと、日本が植民地化してのちに韓国の歴史都市がいかなる変質をとげたかを、ソウル、大田、大邱、釜山、仁川、全州、木浦などを事例に考察したもの、済州島に関するものの三つの分野に大別できよう。

氏が述べているように、高槻の城下町のはずれで父親が米穀店

を営んでいたことに朝鮮への関心は始まる。京都の縁日から研究を出発させて、近江商人に従属した足子商人[17]の研究など、商業地理学とはいいながら歴史地理学的視点が濃厚で、かつ定期市や縁日に出店するインフォーマルセクターが主たる対象であった。そのため、小売商業や卸売業の空間分析という側面は必ずしも強くない。庶民と密接なかかわりの目線での商業の場に関心が向いていた。それが各地の定期市の探訪年にも連なる（図2）。韓国は日本以上に定期市のような在来市場の役割が、解放後でもなお大きい。樋口は『定期市』（一九七七）のなかで韓国の定期市の特色を以下のように要約している。

城邑（都・道庁・郡庁）の所在地や交通要地に多く分布し、一月六場とする五日ごとの開市が大部分である。ただし済州島には定期市はない。三、一〇、一五日ごとの市や年市、朝夕市、特殊市場（薪炭市、魚菜市、家畜市、薬令市）もある。市場の構成は常設店舗、巡回商人、飲食店および付近住民に、各種の金融機関や検査機関が加わる。市場の取引きは原始交換型から原始商業型、中央商人の買い入れ、大資本による工業原料の購入、国際商品の販売などさまざまなタイプがあること、販売商品は穀物、果菜類、綿花、綿糸、繭、織物、藁・竹製品、農機具、生鮮魚介類、畜産物、日曜家庭製品など農に関連する商品が多いことが特色で、その経済圏はいろいろだが、平均して一・六面（面は韓国の行政村の呼称）ごとに存在し、二～三里ごとに分布する。李朝時代に［定期市は―野間追記］一二五〇あり、日本の植民地期に積極増加策をとり、現在でもやや減少気味だが、日本よりもずっと大きな機能を果たしている。[18]

図２　樋口節夫の韓国市場探訪コース
（1977年原図、本図は『近代朝鮮のライスマーケット』海青社、1988、14頁）

常設店舗との並存しながら定期市が繁栄し続ける状況を経験したかった（同書九六頁）という思いが氏のなかにはあった。

この記録では一九九〇年代以降の韓国研究には触れられていない。都市システム、多国籍企業や現代商業、湿地干潟開発やヒートアイランドなどの環境地理学、食文化、農村の観光化、過疎化など多様な展開がみられるが、ここでは触れない。それとともに、これらの分野の研究動向のレビューが、日本人のみならず、日本の大学で勤務する韓国人研究者らによって日本の雑誌に掲載されることが増えていることも、樋口氏が取り上げた時代以降の

ことである。[19] 一方で、氏が分量として多いと指摘した歴史地理分野は、風水地理学（渋谷慎明）や地籍図を利用した集落復原（山元貴継、轟博志）などを除いては相対的に少なくなってきていることだけは指摘しておきたい。

注

（1）私（野間）にとっても二回目の韓国旅行の後、戦前の韓国の伝統的農業技術について関心を深めることになった。その成果のひとつが「朝鮮農耕システムの核心と南北の拡がり―西九州から中国東北地方まで―」東アジア沿海科研・大韓建築学会済州支会・関西大学東西学術研究所共催、韓日共同国際シンポジウム「交流からみた韓国と日本の風土と暮らし―すまい・景観・経済―」、二〇一一年一一月四日、済州道立美術館講堂である。この内容は、のちに「朝鮮農耕システムの核心とその伝播あるいは変形について―黄海経由の文化交渉の可能性―」（森隆男編『住まいと集落から風土をさぐる―日本・琉球・朝鮮―』、関西大学出版部（関西大学東西学術研究所研究叢刊　四五）、二〇一四年、二六七―三一九頁）に結実した。

（2）樋口節夫「地理学における「朝鮮研究」―戦前の一齣―」、織田武雄先生退官記念事業会編『人文地理学論叢』柳原書店、一九七一年、七三九―七五〇頁。

（3）李燦（イチャン）教授（一九二三―二〇〇三）は、ルイジアナ州立大学に留学し、“A Culture of Rice with Special Reference to Louisiana”にてPh.Dを取得後、一九六〇年から八八年まで国立ソウル大学校師範大学（一九六〇―七五）、および社会科学大学地理学科（一九七五―一九八八）のスタッフとして活躍した。退官後も一九九〇年に韓国文化歴史地理学会を設立し、国際地理学連合の副会長として二〇〇〇年のIGCソウル大会に関わるなど、第二次世界大戦後の韓国地理学界において多大な貢献を果たした。専門は文化・歴史地理学、社会科・地理教育、地図学史である。一九四二年に平壌師範学校を卒業している

（4）洪慶姫（Kyun Hi Hong）教授は、本文にあるように一九四一年に奈良女子高等師範学校を卒業し、慶北大学校師範大学教授（一九四八―一九八四）を務めた。一九五九年にはアメリカ（George Peabody 大学）に留学し、一九六八年には慶北大学校にて文学博士号を取得している。専門は都市・村落地理学。『日本で発行された韓国地理関係文献目録　一八八六―一九九一』暁林、一九九四年。樋口は『八十路のメモワール』晃洋書房（非売品）、二〇〇五年、で自らの主書『都市の内部構造』古今書院、のなかで、韓国の都市、ソウル、大邱、釜山、全州の調査の便宜や助言、現地調査でも指導を受けたことに言及している。さらにこの慶北グループ（大邱）の研究者として、刑基柱、李中両、李賛石、金現洙、善白星の名前に言及している（同書四八―四九頁）。

（5）樋口節夫「朝鮮農業の理解のために」、地理、第一三巻八号、一九六八年。

（6）坂根達郎『朝鮮地誌』、一八七八年。樋口は、一八八七年の釜山居留地借入約書調印以降に、渡航者が増え、現地案内の書としてこの地誌が利用されたとしている（樋口節夫『近代朝鮮のライスマーケット』海青社、一九八八年、四三頁）。

（7）笹野儀助「咸境道の現況」、地学雑誌、十一集―二一四、一八八九年。

（8）農商務省の『韓国土地農産調査報告書』は、現在の北朝鮮まで含めて、咸鏡道、平安道、黄海道、慶尚道、全羅道、京畿道、忠清道、江原道の道ごとに地形、地質、土壌、農作物などを詳述した基礎資料である。樋口はこれを「一つの地理書」として位置づけている（『近代朝鮮のライスマーケット』四六頁）。ただしこの

書の「土性調査」は「土地調査」の誤記である。現在は国会図書館デジタルライブラリーで容易に閲覧できる。

(9) 大阪商工会議所の図書室には、当時の朝鮮関係の資料類が現在も所蔵されている。

(10) 中村新太郎（一八八―一九四一）日本の地質学者。東京帝国大学理科大学地質学科卒業し、広島高等師範学校講師、農商務省地質調査所・朝鮮総督府技師などを経て、一九一九年、京都帝国大学に助教授として就任、のち教授。地質学鉱物学教室地史学講座を担当。日本古生物学会会長、日本地質学会会長を歴任。常磐炭田や赤石山脈などの地質構造解明のほか、『朝鮮地名研究集成』草風館、一九九四年、で知られている。

(11) 善生永助（一八八五―一九七一）は、朝鮮総督府嘱託として同府刊行の調査資料の編纂に携わった人物である。一九一〇年に早稲田大学専門部を卒業後、雑誌記者などを経て一九二三年に朝鮮総督府官房調査課嘱託となり一九三五年まで調査活動に従事した。彼が調査および執筆を担当した資料の多くは朝鮮総督府の「調査資料」シリーズに収録されている。『朝鮮の市場』（一九二四）、『朝鮮人の商業』（一九二五）、『朝鮮の物産』（一九二七）、『朝鮮の市場経済』（一九二九）、『朝鮮の生活状態調査一―三』（一九二九―一九三四）、『朝鮮の聚落　前・中・後篇』（一九三三―一九三五）などがある。学習院大学の友邦文庫（友邦協会・中央日韓協会）には、彼が調査活動の一環として蒐集した写真が収蔵され、朝鮮社会経済写真集（善生永助蒐集写真）としてウェブサイト上で見ることが出来る（https://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c03_yuuhou/c0306_zenshou.html）。

(12) 小田内通敏（一八七五―一九五四）は在野の地理学・地理教育学者といわれる。秋田の藩士の子として生まれ、（東京）高等師範学校地理歴史科を卒業後、早稲田中学校（のちの早稲田高校）に奉職、一九二六年には雑誌「人文地理」、その後継としての「都市地理学研究」を一九二九年に創刊する。東京西郊、武蔵野の農村地域の実態調査を今和次郎ともに行った。その成果が『帝都と近郊』（一九一八）である。一九三一年文部省嘱託となり、尾高豊作らと郷土教育連盟を創立。郷土地理研究と郷土教育運動につくした。著作に『郷土地理研究』（一九三〇）、『日本郷土学』（一九四〇）がある。朝鮮関係では朝鮮全域の集落調査（一九二〇―二五）を朝鮮総督府から依頼され、『朝鮮部落調査予察報告』（一九二三）、『朝鮮部落調査報告』（一九二四）を執筆した。「洞」「里」といわれる実質的な集落を重視し、火田民や在朝中国人の調査も行った（岡田俊裕『日本地理学人物事典・近代編1』原書房、二〇一一年、二四九―二五九頁）。

(13) 桝田一二（一八九五―九七五）は、戦前期に済州島の詳細な現地調査を行い、多くの論文を発表している。なかでも済州島から日本本土への出稼ぎや、集落などについて、きわめて早い時期に明らかにしている。人類学の泉靖一とともに戦前期の済州島研究の代表的研究者である。戦後は立正大学で教鞭をとった。著作は『桝田一二地理学論文集』弘詢社、一九七六年、にまとめられている。

(14) 京都帝国大学白頭山遠征隊編『白頭山：京都帝国大学白頭山遠征隊報告』梓書房、一九三五年。国会図書館デジタルコレクションで公開。

(15) 高野史男『韓国済州島―日韓をむすぶ東シナ海の要石』中公新書、一九九六年。

(16) 大韓地理学会「地理学」第一三号、一九七六年六月。

(17) 樋口節夫「足子商人の地理的性格」、人文地理、第三巻五・六号、一九五二年、五〇―五八頁。

(18) 樋口節夫『定期市』学生社、一九七七年、一九七―一九八頁。

(19) たとえば次のような研究展望がある。北田晃司「韓国の都市システムに関する研究動向」人文地理、第五二巻第五号、二〇〇〇

年、四三―五八頁。金科哲「現代の韓国地理学界と地理学教育」、地学雑誌、第一二一巻第五号、二〇一二年、八一五―八二三頁。李哲雨「韓国の経済地理学における開発と研究の動向」、経済地理学年報、二〇一九年、第六五巻第三号、二六〇―二七一頁。

主要研究業績

「京の縁日（市）、その地理的連鎖の問題―縁日商人研究第1報―」、立命館文学、第九六号、一九五四年、五八―七三頁

「米についての地理学の関心とその記録―朝鮮産米研究の現代的意義におよぶ―」、人文地理、第一九巻第一号、一九六七年、五六―七四頁

『商業地域論』地人書房、一九六三年

『比較地域論―地域開発と近代化に関する比較地理』、晃洋書房、一九七二年

『定期市』学生社、一九七七年

『都市の内部構造』古今書院、一九七九年、（学位論文をまとめたもの）

『近代朝鮮のライスマーケット』海青社、一九八九年

『地域理解の原風景』ＯＩＵ研究課題報告、一九九八年

『韓半島と済州島』大阪国際大学地理学教室、二〇〇〇年

『八十路のメモワール』晃洋書房（非売品）、二〇〇二年

【付記】

本稿に掲載した記録は、二〇〇三年一〇月四日に中部大学名古屋キャンパス（名古屋市）で開催された人文地理学会アジア地域研究部会、名古屋地理学会共催の研究会での内容が中心となっている。そのときの標題は「『朝鮮研究』の先達者と業績―解放前と解放後―」であった。会場を設営、この例会の進行を進めて頂いた韓国地域研究や朝鮮の歴史地理学が専門の渋谷鎮明氏（中部大学）に謝意を表したい。録音テープの文字起こしは京都通信社に依頼した。

なお、非売品ではあるが、野外歴史地理学研究会（ニューＦＨＧ）の三代目会長であった山田誠氏（京都大学名誉教授）を中心に、森田勝（堺女子短期大学名誉教授）、辰己勝（元・近畿大学）、辰己眞知子（京都外国語専門学校・非常勤）、東出修一（元・日本旅行）氏が中心となり、この会にかかわりのあった野間（四代目会長）、西岡尚也（大阪商業大学）も加わって、樋口節夫先生追悼文集刊行員会をたちあげ、二〇二二年四月に『微笑みの人―樋口節夫先生追悼文集―』を刊行した。三四名の寄稿と長男・京一氏の文章や略歴、主要著作一覧が掲載されており、氏の都市地理学や朝鮮などの研究のみならず、分け隔てなく人に接してこられた温厚だが筋の一本と通った人柄についても多くの人が言及していることを付け加えておきたい。

Japanese Pioneers of Geographical Studies on Korea Before and After Colonial Period Narrated by HIGUCHI Setsuo

NOMA Haruo

Japanese urban and commercial ex-geographer, HIGUCHI Setsuo (1924-2021), was educated at Ritsumeikan University and served for 21 years as a high school teacher in Kyoto City. He was subsequently employed as a full-time teacher at five universities including his alma mater, Osaka University of Education. He specialized in urban and commercial geography, however, his interest in rice persisted since his boyhood because his father operated a rice dealership in Takatsuki Town, an Osaka suburb.

A large quantity of Korean rice flowed into the Kansai area (Osaka-Kobe-Kyoto) before World War II to compensate for shortages of domestic rice. In such a context, the latter part of Higuchi's research attended to the distribution of Korean rice, periodical markets in South Korea, and regional investigation of Jeju Island.

This scholarly note is based on Higuchi's self-narrated history of his long research career, which was recorded by the Japan Science Promotion Society in 2003. This paper utilizes old and important books and reports, Higuchi's academic exchanges, and his field surveys in South Korea in the 1970s and 1980s to examine his reflections on some senior Korean geographers and rice distribution related research.

キーワード：樋口節夫（HIGUCHI Setsuo）、韓国（South Korea）、定期市（periodical market）、米の流通（distribution of rice）、済州島（Jeju Island）